

自己と他者を活かす人間関係のスキル向上をめざして

—専門教育教科「生活」を応用した保育専門演習プログラム—

How to improve relationship skills to encourage both others and oneself

—Professional childcare programs of advanced specialized education course, "Life Environment Studies"—

勝田 みな

Mina Katsuda

〈摘要〉

本研究では、自己と他者を活かすためのコミュニケーション能力を高めるために、専門教育教科「生活」（以下「生活」）での学びを応用させ、保育専門演習Ⅰ・Ⅱ（以下「ゼミ活動」）で活かすことを試みた。それによって、人とのかかわり方を身に付け、コミュニケーション能力を高め、学生生活を安定的に過ごしていけるような効果について検討した。

ゼミ生へのインタビューから「生活」の応用がゼミ活動を通して社会人としてどのように活かしたいのかなどが明らかになり、各自が行動することによって人間関係のスキルの向上が認められた。また、ゼミ活動では人間関係を円滑に進めるための学習プログラムを作成し、自己と他者の双方を活かすことができるような人とのかかわり方を学習した結果、達成感や自己肯定感を味わうことによって自信につなげ、実習や学生生活へ活かしていけるような具体的な効果が認められた。

今後の課題として、1年次で学修を終えた「生活」やその内容を応用しての「ゼミ活動」へのつながりは確立し実行したものの、実習をはじめ将来社会へ出たときに活かされるようにするためには、大学としてどのような指導を継続し、学生支援をどのように進めていくとよいのか、キャリア教育の視点も入れながら行っていくことが大切である。

〈キーワード〉 コミュニケーション能力 自己肯定感 人間関係 学生支援

I. 問題と目的

保育者や小学校教員のような対人援助の職業に就こうと思う人は、特に人とのかわり方が上手な方が働くことにおいて何かと都合が良い。それは、コミュニケーション能力が求められるからである。保育者や小学校教員は、園児・児童、保護者、地域の人、教職員など多くの人と接するわけで、どのようなタイプの人ともかかわっていかなければならないのである。しかしながら、コミュニケーションをどのように取っていけばよいのかわからない、コミュニケーション能力が低いと思っている学生がいるのは事実である。

労働政策研究・研修機構（2012）によると、企業側が採用試験において「選考にあたって特に重視した点」の上位には「コミュニケーション能力」について例年80%前後の回答が集まっており、9年連続で最重視した能力である。ここまで重視されている能力にもかかわらず、近年、他者への配慮、世間への配慮、双方向の密度の高いコミュニケーションなどが十分ではなく、お互いを支え合う社会的なサポートが乏しく、理解不足や軋轢によって容易に不適應を生じやすくなっている傾向がある。その結果、個々人の孤立を促し、集団や組織の連携的な行動が不十分になりつつあると言える（大坊 2006）。大坊の言う「近年」は論文の書かれた2006年少し前あたりからを指すのだが、結局その「近年」に問題になっている点は、まさに現在にも通用するコミュニケーション能力不足である。企業側が求めている能力は今も変わらないということである。

企業側だけでなく、一般の社会人・地域住民の立場から見た若者に求める能力・資質を見ても、「社会に出てくる若者に求める能力・資質のうち、最近特に不足していると思われるもの」の中で、「マナーや時間を守るなどの一般常識（47.7%）」、「他者への配慮や思いやり（38.6%）」、「あいさつや受け答えが正しくできる能力（38.5%）」、「集団や組織の人びととのコミュニケーション（32.7%）」と報告された。「あいさつや受け答え」はコミュニケーションの基本であり、「他者への配慮や思いやり」はコミュニケーション能力のうち高度な成分である。これらを兼ね備えてこそ、「集団や組織の人々とのコミュニケーション」が可能になる。社会人・地域住民は、現代の若者がこのコミュニケーション能力不足と判断しているといえる。若者のコミュニケーション能力の不足は、他の調査でも同様な結果が出ており、現代若者への警鐘ともいえる（労働政策研究・研修機構 2007）。

保育者養成校の学生は保育者をめざす学生が大半であるが、「あいさつが自分からできない」、「返事がないのでわかったのかわからないのかわからない」と、実習中の巡回指導時に園側から指摘されたことがある。学内での学生の様子を見ている、自分からあいさつができない者は確かにいる。「あいさつをする気持ちになれない」、「あいさつをしても返してもらえない」、「仲の良い人にしかしない」など、あいさつに対する思いはまちまちである。本来、「あいさつとは人と人が出会った時や、別れるときにかわす儀礼的な

動作や言葉。また、その言葉を述べること。相手に敬意・親愛の意を示す行為で、対人関係を円満にし、社会生活を円満にする」(大辞林第三版)とあり、見返りを求めたり親しい人だけと交わしたりするものではない。また、教員側が学生に話をしている「はい」という返事が返ってこない場合もあり、うなずくこともしない。こちらの話を聞く姿勢ができず、例えば顔を上げて聞くなどができていない。「あいさつや受け答え」がコミュニケーションの基本と言われるのは当然のことだからこそ、保育者や小学校教員のように子どもとかかわる仕事に就く者は、この基本的な態度が進んでいなければならないと考える。

このように、「コミュニケーションを取ることの重要性」や「あいさつや受け答えをきちんと行うこと」は、社会人としては当然であるが、実際にどのようにしたらこれらの能力を高めていけるのか理解できていないため、行動に移すことができていない学生がいるのが現状である。

本研究では、①保育専門演習Ⅰ・Ⅱにおいて仲間同士が良好な人間関係であると感じられるように、1年次に履修する専門教育科目「生活」の活動を応用して、ゼミ生同士が積極的にかかわり合い自己肯定感を高める、②実習や学生生活の中で、自己と他者の双方向での関わりを深めることで、コミュニケーション能力の向上をめざす、の2点を目的と掲げその効果を検討していく。

Ⅱ. 研究の方法

1. 専門教育教科「生活」の応用

子ども学科では1年次後期に「生活」を履修する。「生活」は、幼稚園教諭二種免許状取得、小学校教諭二種免許状取得のためには必要な教科で、この教科を履修しなければ幼稚園教諭及び小学校教諭にはなれないことになる。

講義では後期15回だけの学生とのつきあいになる。その時間を雰囲気の良い授業だと感じてもらえるような工夫は当然必要になってくる。そこで、毎回の講義で取り入れたのは「構成的グループ・エンカウンター (SGE)」だった。明里 (2008) は、「学級経営をうまく行うには、学級の雰囲気をよくすることである。それには、学級の仲間関係をよくすることが必要である。仲間関係がよくなるとは、お互い、人間として相手を尊重し、『ありがとう』と感謝でき、他者 (友達) のために無償で働くことができることである。そのような中で、教師も生徒も共に成長することができることである」と述べ、個人の問題を重視するのではなく、講義に出ている学生の集団としての特徴をよく把握し、人とかかわりを意図的・計画的につくることによって人とかかわれる力を身に付けさせていくことが必要になってくる。人間関係の良し悪しを左右するメンバー構成は重要である。はじめの段階では仲良しグループで着席していても、第3回目以降はあえて毎回のグループはメンバーをかえて、多くの人とかかわりを重点において講義を進めた。

毎時間の講義の中では、一人一人の子どもへのかかわり方を子どもの立場に立って考えること、保育者目線で考えることを常に話してきた。教えるためのテクニックを会得するのではなく、保育者は多様なかかわりを持つため、子どもたちの気持ちを聴き取り適切に対応していくことが求められる。明里（2008）は、「教員に必要なこととしてリーダーシップを挙げ、『リーダー』とは、グループの中で起こったことに対して責任をもち、出来事に介入して進めていき、集団をまとめて動かし、引っ張っていく役割がある」と述べ、リーダーの力量が重要なポイントになる。リーダーの条件として國分・片野（2001）は、「(1)やる気（覇気）があること、(2)『構成』できること、(3)自己開示ができること、(4)明るくユーモアのあること、(5)俳優になれること」を挙げ、グループをしっかりと指導しなくてはならないため、学生には(1)やる気、(4)明るくユーモアのあるリーダーを特にめざすように話した。

本研究では、ゼミ生が1年次（平成24（2012）年度）の「生活」を応用することになる。「生活」（平成24（2012）年度）の講義概要は、「生活科の目標と内容、子どもへの活動支援について理解を深める。また、学生自身が体験、表現活動を行うことにより、指導の基盤づくりをする。さらに、幼保小（幼稚園、保育所、小学校）との連携についても考察する」である。岡田（2001）は、「人間形成や教育といえども道具としてのコミュニケーションを用いること、子どもたちがその用い方を学ぶことをないがしろにすることはできない。家庭や学校のコミュニケーションは『人間の理解』を必ず伴っていなければならない。そして、これをこそ真正のコミュニケーションと呼ぶべきだと思える。人間は、理解されることによって、自分を、そして相手をも理解するようになるし、人間世界をも理解するようになるからである」と述べ、概要での「子どもへの活動支援について理解を深める」という観点からも、お互いを理解し合うためにはコミュニケーションの基本を講義内で身に付けさせる必要があった。それは、「学校での授業が人間の知的形成を調節に目的とする営みだからである」（岡田2001）とあるように、1コマ、1コマの講義は重要なコミュニケーションを学ぶところである。普段一緒に行動していなくても講義内で同じグループになった場合は、相手を理解しようと努力してお互いが高められるように工夫してグループ活動を進めていく必要がある。

平成24（2012）年度の講義内容は、①オリエンテーション、自由記述、②「行事」を幼児期の教育・保育の軸に、③本学系列A 保育園の運動会に参加して、④0歳から6歳までの写真を見て発達を考える、⑤体験活動「学内探検」、⑥学習指導要領について、小学校「生活」の教科書を使って、⑦コミュニケーション能力UP、⑧表現活動「クリスマス会」企画・運営、⑨「生活」の授業づくり、⑩まとめ、であった。

これらの講義内容より本研究では、①オリエンテーション、自由記述（わかった、はじめて知った、疑問、活かしたいことなど）、⑦コミュニケーション能力UP、⑧表現活動「クリスマス会」企画・運営、の内容を「生活」の応用として取り組むことにした。

2. 保育専門演習Ⅰ・Ⅱ

2年次の「ゼミ活動」では「保育者は大勢の人とのかかわりをもつため、コミュニケーション能力を高める必要がある。体験活動を行うことによってその能力を身に付け、保育者である前にしっかりした社会人をめざす」ことを目標として取組んだ。

(1) 対象者

愛知県N短期大学子ども学科2年生、ゼミ生9名（男子1名、女子8名）。

(2) 時期

2013年4月～3月。毎週1回のゼミ活動、年間30回。

(3) ゼミ活動内容

<前期>

- ・個人カウンセリング
- ・自己紹介、1分間スピーチ
- ・本格的なアフタヌーンティー
- ・園の壁面を飾る制作物の作成
- ・ミニ先生担当
- ・保育者としてのマナーを学ぶ
- ・クッキングとおもてなし
- ・大学祭に向けての計画

<後期>

- ・個人カウンセリング
- ・大学祭の準備、実践
- ・幼稚園教育実習Ⅱに向けてグループカウンセリング
- ・制作物の作成
- ・ミニ先生担当
- ・ゼミ長へ感謝の会
- ・ゼミ活動発表会の計画、準備、実践

(4) インタビュー

インタビュー協力者は、ゼミ生のうち7名（男子1名、女子6名）である。時期は、2014年6月下旬。場所は、筆者の研究室。時間は約60～90分間。項目は、①ゼミ活動で学んだこと、②現場で役に立ったこと、ゼミ活動でためになったこと、③ゼミ活動でがんばったこと、④「生活」の講義で学んだことがどのように活用されていたか、⑤社会人としてゼミ活動の学びをどう活かしていきたいか、の5項目である。質問がすべて終わった後、インタビューのふりかえりを兼ねてフリートークを行った。インタビューは半構造化インタビューを用い3グループ（2～3人）に分かれて行った。研究上の倫理的な配慮として、事前に研究協力の説明を行い、同意を得てインタビューを実施した。また、記録には個人が特定されないよう配慮した。インタビュー分析はKJ法を使用した。

Ⅲ. 研究の結果

1. ゼミ活動とその効果

ゼミ活動の目標は「保育者は大勢の人とのかかわりをもつため、コミュニケーション能力を高める必要がある。体験活動を行うことによってその能力を身に付け、保育者である前にしっかりした社会人をめざす」であり、学生自らが希望してゼミに入ってきた。仲の

良い者同士で決定したのではなく、本当にコミュニケーションの基本や社会人に必要な能力を学びたいと考えて入ってきたのだ。この目標を踏まえて、本研究では、「ゼミ生同士が積極的にかかわり合い自己肯定感を高める」と「自己と他者の双方向での関わりを深めることで、コミュニケーション能力の向上をめざす」が目的になっている。ゼミ活動内容は、諸富祥彦（2011）「『7つの力』を育てるキャリア教育」と橋本剛（2008）「大学生のためのソーシャルスキル」を参考にして実践した。

ゼミ活動とは別の時間帯にゼミ生に対して個人カウンセリングを行った。これは、筆者が心理カウンセラーを本学（大学院、大学、短大の学生を対象に）において毎週担当していることもあり、50～60分間のカウンセリングを前期、後期に1回ずつ行った。もちろん、必要な場合は、個人カウンセリングを短時間でも行っている。カウンセリングは学生のかかえている問題にもよるが、普段思っていること、考えていること、不安・心配、将来の夢や希望などを中心に聴いた。

また、グループワークなどの体験活動を取り入れ、コミュニケーション能力を高めるために、まずゼミ内の仲間同士が良い人間関係であると感じられるように学生間、学生と筆者との双方向でのかかわり方を学び、実践した。実践しっぱなしではなく、必ずふりかえりを行い、見波（2008）は、「フィードバックの重要性」を述べており、モチベーションに大きく影響を与えていることが明らかになっている。

保育者や小学校教員は子どもたちと同じ目線がかかわることが重要であり、子どもの思いに寄り添い、保育者や小学校教員自身も自己開示を行い、心を開いていくことが大切である。保育者や小学校教員自身が心の安定、安心が得られないと指導が困難な状況になってしまう場合が出てくるのだ。子どもたちと同じ目線になることは、体験を通して学生自身が感得していくことが一番の方法である。体験の少ない学生にはせめて講義の中だけでもロールプレイによる体験活動に積極性を持って取組ませ、適切な行動につなげていかせたいと考えた。

そこで「生活」では、将来保育者や小学校教員として他の教職員や保護者と連携、幼保小の接続のために必要な関係を構築する力を、講義の中で少しずつ身に付けさせるため、グループ活動での体験を中心に行った。岡田（2008）は、「昨今、コミュニケーションの断絶や生活の私事化の傾向が指摘されているが、これは文字通りコミュニケーションが途絶えてしまうのではなく、『言葉は行き交っているが、気持ちが伝わらない』事態を嘆いているのであろう」と述べ、学生同士が分かち合えることを「生活」の講義など大学で学修するすべての教科において心の響き合いを実現させる取組が大切になり、響き合う相手がいない個人に対して共鳴してあげられることも必要になってくる。

「生活」の応用としてゼミ活動のプログラムは、①オリエンテーション、自由記述（わかった、はじめて知った、疑問、活かしたいことなど）、⑦コミュニケーション能力UP、⑧表現活動「クリスマス会」企画・運営、を中心に取り組んだ。以下のような具体的な活

動を行うことによって「生活」を1年次だけに終わらせるだけでなく、気持ちの良好な人間関係を構築し、自信を持って子どもたちの前に立って活動ができるように応用させて実践をした。

(1)項目 ① オリエンテーション、自由記述（わかった、はじめて知った、疑問、活かしたいことなど）について

応用させたのは、「1分間スピーチ」と「ふりかえり」である。「1分間スピーチ」は60秒を4つに区切り、15秒ごとに分けて起承転結で自分自身を語れるように練習をした。

「ふりかえり」は常に自分の考え感想を述べる機会を与え、「構成的グループ・エンカウンター（SGE）」での「エクササイズ」後の「シェアリング（わかちあい）」は当然のことながらしっかりと行った。片野（2009）は、「『シェアリング（わかちあい）』のねらいは、エクササイズを体験して、『感じたこと、気付いたこと（定型の言い方）』を、子ども同士で共有することです。これによって、子ども同士の感情・認知の共有がすすむとともに、認知（受け取り方、考え方）の修正・拡大が実現します」と述べ、感情に焦点をあてて表現された感情語を増やしていくことが重要である。また、単なる雑談やおしゃべりとは違うので、話が逸れた場合は軌道修正する必要がある。自分の感情を話すだけでなく、他の人の感情を聴いてさらに自分の気持ちと照らし合わせていく作業を繰り返すことによって、自己理解や他者理解につながっていくのである。

(2)項目 ⑦ コミュニケーション能力UPについて

人とのかかわり合いを重視して、コミュニケーションをいかに高めていくのかを、体験を通して学んできた。1年次に学修した「保育者のマナー」を取り入れた。また、「ミニ先生」として幼稚園教諭役になり、メンバーを〇歳児と想定して部分実習を行った。さらに、他ゼミ生をクッキング時に招き、人をもてなすことを体験した。人とのかかわり場面においては、行事を通して明るく元気に感じよく接するよう意識付けは欠かさなかった。

後期に「グループカウンセリング」を取り入れた。目的は、自己理解と他者理解である。テーマは「2回目の幼稚園教育実習について思うこと」にした。

(3)項目 ⑧ 表現活動「クリスマス会」企画・運営について

年度末にゼミ活動の集大成となる「ゼミ発表会」で応用させた。発表会では劇（「サザエさん一家」）を行うことにより、台本、配役、音響、照明など分担を決め、練習を重ねていった。しかし、全員がそろわない、誰かがやってくれるだろうなど、他力本願的な考えを持つゼミ生がいるので、全員で力を合わせて取り組んでいくことは大変だった。チームワークが保てない状況が続いたため、「ゼミ長へ感謝の会」を行うことを筆者が提案した。すると、その会を開くにあたっては全員が大賛成し、提案した直後から計画や準備

(プレゼント作成)が始まった。動き出すための内容とタイミングが必要であることが明らかになった。

諸富(2011)は、「一つの物事に粘り強く取り組み成し遂げるという経験は、仕事をする喜びにもつながっていきます。共同体感覚が養われますし、自己貢献感、自分も集団の目的達成に役に立つ人間だ、自分も役に立てる存在なんだという感覚を味わうことが、自己肯定感の育成につながっていくのです」と述べ、普段のゼミ活動と違い、感謝の会や発表会のような少しスケールの大きなテーマがあると仲間同士で達成する喜びを経験させることは、保育者になってからも必ずや自信や自己肯定感につながっていくものとする。

2. 人間関係のスキル向上をめざして

ここで言う「スキル」とは、人間関係において目標を達成するための方法である。この方法にはさまざまな選択肢があり、その中で適切に用いることが必要である。本研究は、「ゼミ生同士が積極的にかかわり合い自己肯定感を高める」と「自己と他者の双方向での関わりを深めることで、コミュニケーション能力の向上をめざす」が目的である。1年間のゼミ活動をどのように感じ、何を習得し、将来に活かしてみたいものは何か、などを半構造化インタビュー形式で行った。インタビューを分析した結果から、ゼミ活動で学んだスキルを使ってコミュニケーションがうまく達成できたかどうかを考えさせた。橋本(2008)は、基本的なスキルを挙げている。「①肯定的反応を示そう、②良いところ探しをしよう、③相手を尊重しよう、④自分も尊重しよう、⑤Iメッセージで伝えよう、⑥言葉以外のメッセージにも気を配ろう、⑦困ったときはひと息入れよう」であり、これらのスキルを活用させ、「良好な人間関係であると感じられるように」と「自信を持って園児の前に立てられるように」の目的達成をめざしたのだ。

インタビューは、A(2人)、B(2人)、C(3人)の3グループに分かれて行った。質問内容は、①ゼミ活動で学んだこと、②現場で役に立ったこと、ゼミ活動でためになったこと、③ゼミ活動でがんばったこと、④「生活」の講義で学んだことがどのように活用されていたか、⑤社会人としてゼミ活動の学びをどう活かしていきたいか、の5項目についてであった(表1「ゼミ活動について」)。

分析は、(1)①②③と、(2)④⑤の2つに分けて行った。また、筆者だけの主観的な分析にならないよう、筆者と他校に勤める教員2名とで検討を行った。

(1) ①ゼミ活動で学んだこと、②ためになったこと、③がんばったことについて

主になるのは次の5つである。

- 1) ゼミ生全員と仲良くなれた
- 2) 話を聞くこと、話すこと
- 3) コミュニケーション、かかわり方

4) 体験すること

5) 表現力、自信につながる、成長した

4月当初メンバーを見て全員がこのゼミは成立するのかと不安になるほど、普段から一緒に行動していない者同士であったため、ゼミ生全員が仲良くなれたと実感した点が第一の成果に挙げられる。仲良くなれたからこそ、メンバーの話を聞くこと話すことが可能になり、コミュニケーション、かかわりができたと感じている。合わせて、体験することの蓄積や、体験を通して自分自身の表現する力が出てきて、その力が少しずつ自信につながり、自分の中での成長ととらえることができた。ゼミ活動の目的を理解しながら成長できたことは、個人の成長ももちろんだが、ゼミ生全員の成長につながっていくものと考えられ、コミュニケーション能力を高める上でも大切である。

表1 ゼミ活動について

Q1 ゼミで学んだこと		
A、B	C、D	E、F、G
<ul style="list-style-type: none"> ・1年に比べて仲良しじゃない子ばかりだった。遊びでしゃべっているのではなく先生役をやって一人一人の考えを聴けた ・みんながどう思っているのかを聴けた ・毎回できたという実感が持てた ・仲良くなるきっかけがあった ・学びの内容が大きすぎる。これを学んだと限定するのではなく、コミュニケーションを取ることを目的が一緒 ・自分の中で成長したのかなと思う ・人と話す能力を学んだ。話していないことが多かったけど、いろいろやっていくうちに話すことができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・誰かが困っているときに固くならず自分がやわらかい雰囲気になろうと思った。それが、3回ぐらいあった ・一人一人のことがよくわかった ・特にKのことがよくわかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生とのかかわり方を学んだ ・抜いていいところと抜いていけないところ。適当でいいところといけないところ ・仲良くなれた ・自分の言いたいことが言えるようになった ・人見知りで全然しゃべれなかったがしゃべれた ・コミュニケーションがとりやすくなった
Q2 現場で役に立ったこと、ゼミでためになったこと		
<ul style="list-style-type: none"> ・対応力。自分の中の常識が正解かどうかじゃなく、周りがガンガン言ってくれて、何を言っても大丈夫と感じた ・影響された。特に、S、K ・表現する力。発表で音響や台本の作成をした ・制作物。グループで協力しながら作った 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミニ先生で子ども目線。気をつかいすぎた ・ミニ先生役はよかった。アドリブ能力が身につけて保育園実習で活用できた ・今まで接していなかった人から自分から積極的にからんだ→人のいいところが見えてくる。自分を出すのが苦手な人に ・制作物のカーネーションづくりがためになった ・学外での交流がよかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係。かかわり方 ・先生との対応力(いい意味で) ・ミニ先生で輪っかの部屋かざりを作った。研究室に飾ってもらってうれしい ・大きな声でしゃべれるようになった ・少しだけ自信がついた ・サザエさんの発表で女子役もできたしミニ先生でびゅんびゅんゴマ作りで人前でも恥ずかしがらない ・大きな声で話せる ・学外でティッシュを箱ごと持っていき手渡ししたことだからやさしくなった
Q3 ゼミで努力したこと、がんばったこと		
<ul style="list-style-type: none"> ・頑張らなかつた。私にとって頑張るとは努力や忍耐がいることだけど、気負うことがなかつた ・みんながたよってくれるがちゃんと分担してやってくれた。やれることをやれるのは頑張るんじゃないと感じた ・サザエさんの発表。学祭のワッフルづくり。調理実習でE先生ゼミを招いておもてなしをした ・Aちゃんのサプライズ会でひきとめる役 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミニ先生の計画と実践(ビンゴ) ・おとなしいKを前面に出した ・学祭でのワッフルづくり ・出席することをがんばった ・一人ずつ時間を決めて発表すること→考える→しゃべる 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に来ること ・ゼミには必ず出席した ・大きな声でしゃべること、笑うこと、 ・学祭で客の呼び込み ・ゼミ発表では波平役(女子学生) ・人の話をまじめに聞いた ・ゼミ発表でのわかめちゃん役(男子学生)

Q4 「生活」の授業で学んだことがどのように活用されていたのか		
<ul style="list-style-type: none"> ・ランダムにペアを作ることや席替えをしていたので「生活」の授業がきっかけでこのメンバーでも大丈夫かなと緊張なく仲良くなれた。決定した時はかなりの不安があった ・気付かないところで「生活」がもたっている ・コミュニケーションをとることは幅広いこと ・学内探検ではどこを回るのか相談ができず、一人の子が行きたいところを回る方法しかなかった→調理実習ではこういう料理がいいとやりたいことが言えた→知らぬ間に自分が出せた 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画すること。時間をこう使うと時間を有効に使える→実習にもつながる ・協力すること ・「生活」では学校探検で学んだことがゼミでは制作物作りで役だった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ある程度自分の主張が大事だということ ・先生とのかかわり方 ・学祭での人あつめ ・ニックネームを作って親しみが持てる ・仲良くしゃべれる ・人とかかわり方を学んだ ・コミュニケーションを学んだ ・仲間が増えた
Q5 社会人としてゼミで学んだことをどう活かしていきたいか		
<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション力。明るさ ・ミニ先生役でやったこと、自分なりにやれる。よかったことやこうした方がいいということを言ってもいいんだということを学んだ ・おじぎの仕方やあいさつの仕方を実践したこと ・マナーを自然に覚えることができた ・学祭のワッフルを買ってもらうためにお客に声をかけることが子どもへの声かけにつながる 	<ul style="list-style-type: none"> ・わからないことはすぐに質問する ・盛り上げる能力が身についた ・発表すること ・素を出すことができたし切り替えることを知った 	<ul style="list-style-type: none"> ・けじめをつける ・やるときはやる ・時間厳守 ・コミュニケーションの取り方 ・目上の人への対応 ・遅刻をしない ・あいさつをきちんとする

(2) ④「生活」の講義で学んだことがどのように活用されていたか、⑤社会人としてゼミ活動の学びをどう活かしていきたいかについて

主になるのは、次の4つである。

- 1) 人とかかわり方
- 2) 自分を出すこと
- 3) 時間の使い方
- 4) マナー、あいさつ

「生活」の応用と改めて言わなくても気付かないところで「生活」が基になっている。学んだことがどのように活用されていたかは、人とかかわり方は重要だと考えており、コミュニケーション能力を高めるためのきっかけとなっている。安心して自分の主張したいことが述べられる雰囲気がゼミ内には出ているため、人間性をも豊かにするチャンスをゼミ生たちに与えることができたのではないか。また、時間は誰もが平等に使うものなので、遅刻や欠席（無断欠席）はしないこと、計画的に取り組む、けじめをつける、切り替えるなど社会に出てからは守って当たり前と思われる時間について関心を寄せているのは今後の日常生活には大切なことである。さらに、コミュニケーション能力を高めるには双方向のやり取りが存在することになる。人間関係を円滑にするためにもマナーを守り、コミュニケーションの基本であるあいさつを自ら笑顔で元気よく行うことによって、相手も自分も気持ちの良い1日のスタートを切れることになる。

インタビューの最後の時間帯にフリートーキングの場面を設定し、ゼミ活動について自

由に語り合った。グループカウンセリングとは違うインタビュー形式でのやり取りは初めてだったので、今までのゼミ活動の中で何度も行っていたふりかえりとしてフリートーキングを入れてみた。橋本（2008）が、「人間はお互いに助け合ったり、迷惑をかけ合いながら生きていかざるを得ないものです」と述べているように、進級して（本学科は短期大学3年制）新しいゼミに所属し、2年次のゼミ活動において自分自身はどのような気持ちを持っていたのかふりかえった際に、自分の内面を見つめる機会になり、自分自身をしみじみと味わうことができたのではないか。フリートーキングで出てきた内容は、「メンバーがよかった。誰が欠けても嫌」、「一致団結している」、「居やすい、気分的に楽」、「楽しい、落ち着く」、「話ができる」、「信頼関係がある」であった。

IV. 考察

本研究では、①保育専門演習Ⅰ・Ⅱにおいて仲間同士が良好な人間関係であると感じられるように、1年次に履修する専門教育科目「生活」の活動を応用して、ゼミ生同士が積極的にかかわり合い自己肯定感を高める、②実習や学生生活の中で、自己と他者の双方向での関わりを深めることで、コミュニケーション能力の向上をめざす、の2点を目的に設定した。

1. 「生活」を応用した効果について

小学校学習指導要領（文部科学省 2008）では、生活科の目標を「具体的な活動や体験を通して、自然と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う」としている。また、野田（2008）は「自立への基礎を養うことは生活科の目標であり、三つの側面がある」と述べ、「①学習上の自立、②生活上の自立、③精神的な自立、の三つの基礎は互いに支え合い補い合いながら豊かな生活を生み出していくことに役立てられる。子どもの実態、保護者の願いや地域の要望などを踏まえて明確にしていく必要がある」と述べている。自立することがなかなかできない若年者が増えてきている現代社会において、小学校生活科の目標に「自立」ということばが盛り込まれているのは、人として生きる力をどのように育んでいくのかを低学年の教科の中において、気付きを得ながら身に付けさせていくことが可能であり、自立への基礎を養うことが重要であるからである。大学生が自立していくことは、まさに、社会人として生きていくためにもっとも重要な点であり、自立するためには、大学生のうちに地域社会、自然、人、自分自身に気付き、そこから考えを深め、行動につなげていくことであると考え。

「生活」の講義の中では、自分の考えや気持ちをプリントにまとめさせた。書くことの経験が少なくなっている学生に対して、あるテーマについて文章にする作業は重要で

あり、毎回の講義で一定量を書き上げることの反復練習を欠かさなかった。また、プリントに書かれた学生からの考えや感想には、筆者がコメントを書き、紙面上において学生と筆者とのコミュニケーションを確立させた。感情を文章化し、筆者がフィードバック情報を提示したことにより、普段なかなか話すことができない大学生活の中で、少しでもかかわっていると感じられるような環境づくり、いわゆる双方向のコミュニケーションが成立した。

学生が小中学生の時代は、「ゆとり教育」が2002年に実施され、その後、学力低下や学力格差が社会の注目を集めた教育の大きな問題になったところである。2008年改訂の小・中学校の新しい学習指導要領では、学力低下を受けて授業時間の増加につながった。小針(2011)は、「授業のスケジュールは過密化し、すべての子どもたちが学校教育を通じて時間をかけて『確かな学力』を身に付ける機会を奪うことになってしまう」、「いまこそ求められているのは、すべての子どもが十分に基礎学力を習得し、それを活用し、自ら調べ考えることのできる」と述べており、基礎学力がしっかりと身に付いていないまま大学へ進学した学生が少々いるため、勉強に取り組む姿勢が消極的な学生もいる。そのような学生の状況から、特に一定量を書かせる作業は重要であったと考える。

「生活」を応用することはごく自然に対応することができた。それは、少なくとも「生活」の講義内だけでもいろいろな人とかかわってほしいという考えから毎回席替えを行ったことも自然に対応することができた理由のひとつである。毎時間グループのメンバーが替わることによって、各自が積極的にかかわる姿勢を学び、かかわり方を実践した。しかしながら、グループ内の活動がいつもうまくいくとは限らない。メンバーの組み合わせによっては、つまらない講義時間になる場合もあろう。それでも、その時間のグループでの体験活動を行い、自分の考えや気持ちをプリントにまとめさせたりしたことがどのように働きかけを行えば人とかかわりを円滑に双方向でやっていけるのかを考え行動へ移すきっかけとなった。

プリントに書かれた考えや感想には必ず筆者がコメントを書き、紙面上で学生とのコミュニケーションを確立させたため、ゼミ生と筆者との双方向のかかわりが成立しやすかった。大学生活において「生活」での学びを常に感じているわけではないが、例えば普段話さない人ともグループを組むことによってかかわり方を学び、実践に移すことができたこと等がわかる。「生活」の活動から気付きを得ることが明らかになった。諸富(2011)は、「出会いに生き方を学ぶ力を育てていく」と述べており、その背景には、「ブランドハップスタンスセオリー (J.D.クルンボルツ)」の発想がある。「今回はどのようなメンバーだろうか」と偶然の出会いをわくわくしながら柔軟な心を養っていくことが大切になってくるのである。

2. ゼミ活動の取組の効果について

神長（2010）は、「保育は、人と人との心のふれあいを通して、子どもたちの自立を促す営みです。保育者には、子どもを真ん中にして、保護者との信頼関係や、保育者同士の協力関係をつくることが求められ、常に、子どもを取り巻く人間関係が、子どもの発達にとってよりよいものとなるように働きかけていくことが求められます」と述べている。ゼミ活動では、保育者としてスタートする際に心地良いやり取りができるように、立ち居振る舞いや社会人としてのマナー、話の聴き方、話し方、身に付けておくべき心得などを学習させた。アルバイト経験（特に接客、販売など）のある学生は、アルバイト先でこのようなマナーが身に付いていることが多い。マナーは普段から意識していなければ、身に付いていかないものである。

「ミニ先生」は、幼稚園教育実習Ⅰまでに1回体験をした。ボール遊び、シャボン玉あそび、折り紙で部屋の飾り制作、こま作りなどミニ先生役が教育実習を想定してメンバーに取組ませた。体験活動を多く取り入れることとふりかえり（シェアリング）の場を設けて、自分自身の良かった点、改善点を挙げ、メンバーからのフィードバックを受け、常にコミュニケーションを意識させた。「ミニ先生」を通して自己理解や他者理解を促し、ゼミ生同士の信頼感や自己肯定感を身に付けさせるきっかけとなることが認められた。

クッキングとおもてなしでは、他のゼミ生を招いて会食会を行った。テーブルコーディネートとして名札、メッセージカード、おりづる、手作り箸置き、食器の配置、おもてなしとして入口からの案内、メニューの説明、会食中のトーク、食事を出すタイミング、食器類の片づけ、出口までのお見送りなど、普段なかなか接することのできない内容をマンツーマンで体験させた。相手のためにどのような振る舞いが心地よく感じられるのかなど常に相手の立場に立って行動することは難しかったようだ。他ゼミの学生は、もてなし側が普段の学生と違う様子が戸惑いや照れくささをはじめ感じていたようだが、もてなししてもらっていることでどのように接してもらえると嬉しいのか、こうしてほしいなど、中にはもてなししてもらっている途中でいくつかのリクエストが出たところもあった。

田澤・梅崎（2013）は、「大学生活の達成が自尊感情に与える影響として、前期において、サークルでたくさんの友人をつくること、何でも話せる友人をもつことを達成できた者は、自尊感情が高かった。後期においては、社会、経済に興味をもつことを達成できた者は自尊感情が高かった」と調査結果を示している。友人をつくることにより、精神的な安定を確立していれば、自分の周りだけではなく、社会全般に目を向けることができる。お互いに心地よく過ごすために自らがまず楽しいと思えるよう行動を起こすとともに相手を尊重することが重要になってくる。

後期の幼稚園教育実習Ⅱはゼミ生のほとんどが1回目の実習園と同じだったので反省を踏まえて2回目はどのような点を目標として特にながらみたいのか、または不安に思うことをグループカウンセリングの中で出し合った。グループカウンセリングにはルールがあ

る。メンバーに対して①受容的・共感的に聴く、②自分の思いや気持ちを表現する、③批判・中傷しない、④この場で聴いたこと見たことはほかで言わない、である。片野(2009)は、「グループの力(働き、機能)をひとことで言えば、グループには人を育てたり、癒したりする機能があるということ」と述べている。人の話を「聴く」という機会がほとんどないゼミ生にとって、グループカウンセリングを通して、実習経験から何を学びどのように考えそれを次の実習に向けてどう生かしていきたいのかなどをグループ内で発表し宣言していくことが、意欲や保育者としての意識付けにつながっていった。自分一人だけではない、ゼミ生同士同じような思いや不安やことばにできないが心に持っているものへの共通点がそれぞれに感じる事ができた。

グループが成長していく観点として、片野(2009)は、「①それぞれのメンバーがグループのために何らかの役割を分担し、こなしている、②サブグループが固定化されず(ペアリングがなく)、グループが一つになっている、③互いが介添え役、代弁役、介護者を心がけている、④個人的な問題でも、他人ごとにとらえず、みんなで解決しあおうとしている、⑤仲間に対して受容的・共感的である、⑥個人的に相談したりされたりしたことでも、後でオープンにし、みんなで共有しあおうとしている、⑦発言や行動を無理強いせず、沈黙の自由を尊重しあっている、⑧自分の思いや気持ちを、臆しつつも口に出している、⑨自己開示の深淺、発言の頻度数、ふれあいの度合いなどの個人差を許容しあっている、⑩各メンバーの動静を全員が承知している」と挙げている。これらの観点はグループカウンセリング時だけではなく、ゼミ活動やひいては大学生活においても通じるものとなっている。特に、仲良しグループで本ゼミに入ってきたわけではないので、ゼミ活動がスタートした当初や後期の始まり、実習(前期と後期)後は活動時の集まりが悪く、これらの観点に注目していくことは困難であった。しかし、ゼミ生がまとまるためにはまず筆者がリーダーシップをとり、自分なりの考えや見方を根気よく伝えていった。それは、ゼミ生同士が自分らしく、しかもうまくやれるようにどのようにしたらよいかを考えて行動に移していけるようにするためである。また、片野(2009)は、「学生が『折り合い』をつけていくことがベターだと答えます。しかし、これは妥協する意味に近いのです。私は、そうではなくて、一人一人が違うところから出発して、どうしたらその違いをそれぞれに認め合えるのか、それぞれを生かせるのかを話し合うことが大事であると考えています」と述べている。一人一人を大事な人間として尊重していく気持ちを持たせるために、ゼミ活動を通じて～を体感していくことにより、園児や児童を前にしたときにその子どもに合った接し方ができるようにゼミ活動において身に付けさせた。

「ゼミ長へ感謝の会」は、全員がお互いの役割を心得て、ゼミ長のために一つの目標に向かって作り上げていった。そして、大成功に終わった「ゼミ長へ感謝の会」で、普段からゼミ生のために同学年の学生たちのために動いたゼミ長は、自分のために会を開いてくれたゼミ仲間へ心からのお礼を伝えた。

この「感謝の会」を活かしてゼミ発表会に取組んだ。発表会は2月に行われたため、準備、練習時から体調を崩して参加できない者、当日欠席した者、練習にほとんど参加できずぶっつけ本番のような者などいろいろであった。ゼミ生のほとんどは義務教育の時期にリーダーシップを発揮して物事に取組んだ経験のない学生たちだったため、当日近くなっても誰かがやってくれるだろうとなかなか重い腰をあげようとしなかった。しかしながら、ゼミ発表会の出し物である「サザエさん一家」を成功させたいという気持ちだけは一致していたので自分の担当を確認して練習を始め出した学生が良い影響を出しはじめ、「自信を持って園児の前に立てられるように」の目標を達成するために発表会に臨んだ。

インタビュー分析から、コミュニケーション能力を高めるまでには学ぶ姿勢、今回はゼミ生同士が仲良くなることから始めた。ゼミ生同士は、1年次特定の仲良しグループで行動していないため、第1回目のゼミ活動では、全員がお互いを見て「このゼミは大丈夫だろうか。仲良くできるのだろうか」と感じていた。それぞれが好き勝手な方向を見ているような雰囲気もあり、「良好な人間関係」とは程遠いメンバー構成であった。橋本（2008）は、「自分が相手のことを好ましく思えば、相手も自分のことを好ましく思うようになりやすいという『好意の返報性』は、対人関係の基本原則の一つです」と述べ、まず、肯定的に相手を受け入れる、相手の発言に反応することが重要になり、態度で示すことに意義があると話した。

小学生の頃からリーダーとしてクラスを引っ張ってきた学生は残念ながら一人もいなかった。ゼミ活動の中でカウンセリング（個人、グループ）を行い、自信をどのように身に付けていくとよいのか考えさせた。諸富（2011）は疑似体験モデルを通して「社会や人に貢献することに喜びを感じる力」を育てていくと述べており、ミニ先生役を全員が体験したことは効果的であったことが明らかになった。また、「教師のキャリア創造のための九つのレッスン」の中で、「一步踏み出す勇気を持って」と述べている。「生活」の体験活動でうまくいかない場合すぐに「無理」と言い放ち、動こうとしない学生がいたが、ゼミ活動では、メンバーがそれぞれ楽しく明るく過ごしたいと共通理解のもと、お互いが「やってみようかな」と動くことが自然にできていた。行動することでチャンスを手に入れ気付きを得ることにつながる。せっかく同じゼミに所属することになったのだから、「無理」と言う前に、「やってみようかな」と前向きな心で自分自身を開いていくことを伝えていくためにも、良好な人間関係をいかに築いていけるのが検討課題として挙げられる。

さらに、諸富（1999）は「子どもの人間関係を育む学校は、まず、教師同士の心のつながりを大切にしてほしい」と述べている。例えば、大学内において学生を指導している時、ある先生は○○と話し、別の先生は△△と話し、では、自分はどうしたらいいのだろうと混乱させてはいけない。教員同士が共通理解のもとで学生に接することは基本的なコミュニケーションであろう。ましてや、教員同士があいさつすら交わせないような間柄であったり他の教員の批判を学生の前で話すことがあったりしたらとんでもない話である。その

教員が、学生自身にとって講義に限らず多方面にわたって教えてもらい身近な存在であったならば、学生の心中は穏やかでない、その学生が気の毒である。結局は、学生にとって一番身近な教員同士の関係がいかに良い雰囲気を作っているのか、教員同士の心のつながりをお互いに築きあえることこそが大切である。そういった面でコミュニケーションが低く、精神的に大人になりきれない教員がいることも残念ながら見受けられる。

V. まとめ

メンタルヘルスの良い人とは、「I am OK」、「You are OK」、「They are OK」がそろっている人であると國分（2001）は話す。心が健康になり、人間としての成長に取り組んでいけることをめざしている。ゼミ活動ではこの3点をめざしたのだ。

心のふれあいが必要なのは、人間はどんな人でも心のふれあいをもちたがっているからであり、人を育てられるのは人間でしかないことが理解できる。コミュニケーション能力を高め、ゼミ活動の中で練習を積んで、実習や学祭、発表、もてなしなどに活かすことで少しずつでも自信をつけていくことができただけではないだろうか。

今後の課題は、1年次で学修を終えた「生活」やその内容を応用しての「ゼミ活動」へのつながりは確立し実行したものの、実習をはじめ将来社会へ出たときに活かされるようにするためには、大学としてどのような指導を継続し、学生支援をどのように進めていくとよいのか、キャリア教育の視点も入れながら行っていくことである。

なお、本論文はその一部を日本教育カウンセリング学会第12回研究大会にて発表した。

引用・参考文献

- TFU リエゾンゼミ・ナビ <http://www.tfu.ac.jp/liaison/edu/> 「6章 問題解決 4. KJ法をやってみよう」2014/9/1
- 明里康弘（2008）「どんな学級にも使えるエンカウンター 20 選中学校」図書文化社
- 梅崎修・田澤実（2013）「大学生活と自尊感情 大学1年生に対する継続調査」『大学生の学びとキャリア 入学前から卒業後までの継続調査の分析』法政大学出版局
- 岡田敬司（2001）「コミュニケーションと人間形成—かかわりの教育学Ⅱ—」ミネルヴァ書房
- 片野智治（2009）「教師のためのエンカウンター入門」図書文化
- 神長美津子（2010）「キラッと光る保育者のマナー 現場での心がまえ・緊急対応・常識マナーも身につく！」ひかりのくに
- 川喜田二郎（1986）「KJ法 渾沌をして語らしめる」中央公論社
- 國分康孝（1989）「人を育てるカウンセリングマインド」日本生産性本部
- 國分康孝・片野智治（2001）「構成的グループ・エンカウンターの原理と進め方 —リーダーのためのガイド」誠信書房
- 小針 誠（2011）「子どもの勉強と学力」『子ども・若者の文化と教育』財団法人放送大学教育振興会
- 大坊育雄（2006）「コミュニケーション・スキルの重要性」『日本労働研究雑誌』No.546
- 大辞林第三版
- 野田敦敬（2008）「小学校学習指導要領の解説と展開 生活編」教育出版

【研究論文】自己と他者を活かす人間関係のスキル向上をめざして

- 橋本 剛 (2008)「大学生のためのソーシャルスキル」 サイエンス社
- 見波利幸 (2008) 新入社員早期離職防止のためにできること 税務経理協会
- 諸富祥彦 (1999)「こころの教育の進め方」教育開発研究所
- 諸富祥彦 (2011)「『7つの力』を育てるキャリア教育」図書文化
- 文部科学省 (2008)「小学校学習指導要領 生活」
- 労働政策研究・研修機構 (2007)「第5章 社会人・地域住民の立場からみたキャリア教育」統計情報
- 労働政策研究・研修機構 (2012)「働く若者への期待—意識の変化と就労支援」ビジネス・レーバー・トレンド